

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520548

研究課題名(和文) 出来文の通時的変化に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Preliminary Research on Diachronic Transition of Emergence Sentences

研究代表者

川村 大(Kawamura, Futoshi)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：50234133

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、動詞ラレル形(「動詞+レル・ラレル、ル・ラル、ユ・ラユ」の形)および動詞見ユ・聞コユなどを述語とする文について、格表示など、構文の変遷の概略を調査することを目指した。『宇治拾遺物語』『徒然草』のデータベースを完成したほか、『平家物語』『虎明本狂言』のデータベース作成に着手した。また、成果として、期間中に著書1点、論文数点などを公刊した。

研究成果の概要(英文)：In this research, 'emergence sentences' means sentences or constructions which have predicates such as 《V+-(r)areru, (r)aru, (r)ayu》 form verbs or miyu (mieru), kikoyu (kikoeru) and so on. This Research aimed to clarify the outline of diachronic transition of emergence sentences, in particular noting on case alternations.

研究分野：日本語学

キーワード：出来文 格体制 受身 自発 可能 尊敬 ヴォイス 受動

1. 研究開始当初の背景

(1) 標題に言う「出来文」とは、動詞ラレル形(「動詞+レル・ラレル、ル・ラル、ユ・ラユ等」の形)および動詞見エル(見ユ)・聞コエル(聞コユ)などを述語とする文のことである(尾上圭介 1998-99, 2003、川村大 2005)。これらの文は受身・自発・可能などを表す多義形式であるが、また同時に、対応する形式(動詞にレル・ラレル等の付かない形、動詞見ル・聞クなど)を述語とする文との間に、規則的な格体制の異なり(いわゆる格交替)が有ることが知られている。

(2) 古代語出来文と現代語出来文とでは、構文の多様性の違いや各下位類の量的多寡の違い、格体制のあり方の違いが認められる。例えば、間接受身文(「私は子供に死なれた」(「子供が死んだ」)など、対応する非受身文の動作対象ではない名詞項が主語になるもの)や、非情物主語受身文(「会議が議長によって招集された」など、いわゆる非情の受身)は、いずれも現代語のほうが種類も多様で出現頻度も高い。

自発文は、古代語において述語動詞の種類・格体制の類型・意味的類型のいずれも多様であった。すなわち古代語では、自動詞や意志的行為動詞が自発文述語になりえた(「うち泣かれたまひぬ」(源氏 須磨)「おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつづ」(源氏 帚木)など)し、動作対象がヲ格のまま残る自発文(「かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思ひたまへられはべる」(源氏 桐壺)など)が存在し、「すずりに髪の入りにすられたる」(枕 28段)のように、不注意な行為を表す例もあった。それに対して、現代語の自発文は、知覚・感情・思考を表す他動詞だけが述語になり、動作対象はガ格でしか現れず、表す事態も、対象たるモノの存在を知覚的存在・感情次元での存在等を表すものにほぼ限られている。「居眠りしている人がちらほら見受けられる」「息子の将来が案じられる」「故郷の事が思い出される」など。(以上、川村(2004)等による)

このような、出来文の構文をめぐる通時的変遷を、文献上の実例に基づいて一定程度明らかにすることが要請されている。

(3) 受身文などの歴史的変遷については、すでに研究が無いではないが、さほど多くない。比較的よく調査されている非情物主語受身文ですら、古代語からの通史的調査は清水(1980)以後なされていない。間接受身文の発達過程については堀口(1983, 1990)の概略的な議論以後検証はなされていない。可能文の構文の変遷は渋谷(1993)の調査を除くと、もっぱら近世～近現代の格体制の調査しかなされておらず、自発文に至っては全く手付かずである。また、上記清水(前掲)以下の諸業績は、出来文をめぐる今日の知見の蓄積や問

題関心の高度化に伴い、十分満足できるものではなくなっている。今日的な観点を反映した、より詳細な再調査が求められている。

2. 研究の目的

出来文述語(動詞ラレル形、見エル・聞コエル等)のとり構文(支配する名詞項目の種類、格表示等)の通時的変遷について、その概略を調査する。主たる調査事項は次のとおりである。

(1) 受身文の種類の変遷

堀口(前掲)によれば、古代語の間接受身文は他動詞を用いたいわゆる「持ち主の受身」や「競合の受身」にほぼ限られており、「子供に泣かれる」のような本格的な自動詞受身文は近世以降の成立という。しかし、堀口の議論は作品ごと・種類ごとの用例数を示さず、論証過程にも種々の問題が認められる。丁寧な再調査による検証が必要である。

(2) 非情物主語受身文の諸下位類の量的変遷

従来の研究は、非情物主語受身文を一括してその総数を文学作品ごとに数えるという調査のみである。しかし、非情物主語受身文には、動作主表示のあり方や意味的特徴をめぐって、相当異質な下位類が存在する(川村 2003, 2004)。近代以降欧文直訳体の影響で発生したとされるタイプの非情物主語受身文(金水(1993)ほか)の内実をさらに明らかにするためにも、複数の下位類が存在することを意識した通時的調査が必要である。

(3) 自発文の変遷(格表示、意味的下位類に着目)

古代語では自発文・可能文の格体制は同一で、「動作主項、対象項・ガ・ノ・ヲ」というものであった。現代語では自発文・可能文ともに動作主項を二表示するようになった上、自発文では対象項目をヲ表示することは(ほぼ)なくなった(川村 2004, 2005, 2008)。このような変化がいつ起きたかについて調査する。また、自発文の意味的類型は現代語では減少している(先述)が、この点をめぐる歴史的変遷過程も調査する。

3. 研究の方法

(1) 各時代の主要文学作品から、出来文の用例を抽出し、構文情報等をタグ付けしたデータベースを作成、分析を行なう。

・調査資料はなるべく電子化されたもの(国立国文学研究資料館公開のもの等)を用い、コンピュータによって作業する。市販されている電子化資料については購入する。

・作業にあたっては、補助員を雇用する。作業用のコンピュータを貸与して作業を進める。

・当初調査対象として挙げた資料は下記のとおりである。

『栄花物語』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『平家物語(覚一本)』『天草本伊曾保物語』『虎明本狂言』など。

(2) 作業に当たり、作品の全訳付き注釈書を研究代表者の研究室に備え、補助員の利用に供する。また、古代日本語や日本語文法・言語類型論に関する近時の知見を得るため、近時新たに出版されたものを中心に、古代日本語・日本語文法・言語類型論に関する図書や関連する雑誌論文を収集する。

このことの事情は以下のとおりである。研究代表者の勤務校は外国語大学であるため、学内で雇用する補助員は古典文学について詳しい者が少ない。効率のよい作業を進めるためには、全訳付きの注釈書が手軽に利用できる環境の整備が必要である。勤務校には既に古典文学の全集が既に何組か購入済みであるが、本研究の補助員が利用しようとしても貸し出されている場合が少なくない。また、同様の理由で、古代日本語の資料・研究文献も他大学に比べて整備されていないし、大学共通の図書予算での購入はあまり期待できない。これまでに研究代表者の努力により関係文献の整備はある程度果されているが、今後の研究遂行のため、継続的に整備を進めなければならない。

4. 研究成果

(1) 以下の、比較的小規模の作品について、データベースの作成を完遂し得た。

『方丈記』
『三宝絵』(東大寺切・観智院本)
『宇治拾遺物語』
『徒然草』
『隆達節』

しかしながら『平家物語(覚一本)』『虎明本狂言』については、データベース作成に着手したものの、完遂には至らなかった。これは、本調査に適切な補助員が初年度しか確保できなかったことと、研究期間の後半において研究代表者個人の校務が増加したことによる。期間は終了したが、今後も継続して完成を期する予定である。

(2) 本研究に関連して、学位論文と、それに基づく著書1点を公刊した。また、雑誌論文3点を公刊し、研究会等での講演などをおこなった。詳細は報告書末尾に示してある。

(3) 図書・論文等を整備し得た。

<文献>

尾上圭介(1998-99)「文法を考える 5~7 出来文(1)~(3)」『日本語学』17巻7号,10号,18巻1号

尾上圭介(2003)「ラレル文の多義性と主語」『言語』32巻4号

川村大(2003)「受身文の研究史から「被影響」の有無をめぐる議論について」『言語』32巻4号

川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬 動詞ラレル形の世界」尾上圭介編『朝倉日本語講座 第6巻 文法』朝倉書店

川村大(2005)「古代日本語のラレル形について 古代語の観点から」『日本語文法』5巻2号

川村大(2008)「『見ゆ』『聞こゆ』『思ほゆ・思ゆ』の格体制 動詞ラレル形との対照の観点から」『東京外国語大学論集』77

金水敏(1993)「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究 第九集』武蔵野書院

清水慶子(1980)「非情の受身の一考察」『成蹊国文』14

渋谷勝己(2003)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33巻第1分冊

堀口和吉(1983)「はた迷惑の受身 考」『山辺道』27

堀口和吉(1990)「競合の受身」『山辺道』34

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

川村大、ラレル形述語文における自発と可能 古代語からわかること、日本語学、査読無、32巻12号、2013、pp.30-42

川村大、動詞ラレル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について、国語と国文学、査読有、89巻11号、2012、pp.114-127

川村大、受身文研究の二つの立場 研究史の構造的な理解のために、国語と国文学、査読有、88巻9号、2011、pp.47-62

[学会発表](計4件)

川村大、いわゆる「ヴォイス」をめぐって、第6回東京外国語大学・神戸市外国語大学大学院合同セミナーにおける講義、2015

川村大、日本語の「受身文」について
ラレル形述語文の一用法という観点から、ドイツ文法理論研究会における講演、2013

川村大、動詞ラレル形をめぐって 古代語の観点から 語学研究所定例研究会における講演、2013

川村大、日本語 動詞〔ラレル〕形・〔サセル〕形と「動詞の自他」、語学研究所定例研究会における講演、2012

〔図書〕(計1件)

川村大、くろしお出版、ラル形述語文の研究、2012、430

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

〔その他〕

川村大、国際日本学研究会における古典語教育の位置、国際シンポジウム「国際日本研究 対話、交流、ダイナミクス」における報告、2016

川村大、大修館書店、受身³、日本語文法事典(日本語文法学会編)、2014、pp.52-55

川村大、大修館書店、可能、日本語文法事典(日本語文法学会編)、2014、pp.122-124

川村大、大修館書店、自発、日本語文法事典(日本語文法学会編)、2014、pp.258-259

川村大、古代語ラル形述語文の研究(学位請求論文)、東京大学大学院人文社会系研究科に提出 博士(文学)の学位取得、2012、291

6. 研究組織

(1)研究代表者

川村 大(KAWAMURA, Futoshi)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：50234133